Osaka University Knowledge Archive

Title	「生活への問いかけ」 : デザイン・情報・スノッベリ
Author(s)	金村, 京一
Citation	デザイン理論. 1991, 30, p. 109-110
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53212
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

生活への問いかけ

金村京一

私達が取り組んでいるデザインに関する理論的研究は，学問としては，未だ浅い歴史しかもたない。従って，他の様々な学問領域と比較するならば，学問としての充分な体系性を確立しているとは云い難い。仮に，デザインの歴史が人類の文化の歴史とともにその歩みを始めたと考えるのであれば，これはいささか奇妙なことである。先ず，この奇妙さの解消を，考察の足がかりとしてみたい。

何らかの学問的探究が始められ，発展する為には，次の二つの条件が必要であると考えられる。一，その研究対象に対して知的な好奇心をもつ個人が複数，存在すること。二，社会が，それらの個人が導き出す成果に，何らかの期待を抱いていること。デザインに関して云えば，この二つの条件が満たされ始めたのが，比較的，最近のことであったと考えられるのではないだろうか。そしてそれは，被支配者としての民衆が，自らの生活空間を構成する品々の購入に対して，選択する権利や能力をもち始めた時代，即ち，西欧社会にあっては，産業革命の成熟期としての，18世紀から19世紀にかけての頃と考えられよう。それ以前の時代にあっては，デザインに関わる人々，即ち，制作者としての工芸職人，使用者としての支配階級及び民衆の間には，デザインを学問の対象として考える必要がなかったと思われる。

19世紀の半ば，イギリスから徐々に盛んになっていった，デザインに対する学者や知識人たちの積極的な発言は，今世紀に至り，デザイン史の確立へと向かっていった。現在のデザイン史は，学問としてのある程度の成熟期を迎えたと考えられるが，このことは，デザインに関する理論的研究の完成を意味しない。歴史とはあくまで過去への眼差しであり，現在や未来の問題に，直接には関わらないからである。また，デザイン史の多くが，美術史を規範としていることにも，少なからぬ問題点が潜んでいるように思われる。と云うのも，美術史が扱う過去の事実（ドキュメント）とは，現在までに，保存や記録の決定が成されたものに限定されるからである。そこには，過去の誰かの意志や価値判断が働いており，美術史家はそこから自由になることが難しいと思われる。デザイン史にも同様の特殊性がある恐れが否定できない。過去の人々の生活空間を構成してきた品々は，どのような形で私達に事実（ドキュメント）として残されているのであろうか。過去の価値判断の制度に拘ることなく，できる限り多くの事実（ドキュメント）を探ること，これはこれからのデザイン史に課せられる，困難な課題であると考えられよう。

さて，デザイン史と並んで，デザインに関する学究活動の両輪のもう一方を成すと考えられる，云わばデザイン論は，デザイン史以上に，学問としての体系化が遅れているように思われる。或いは，デザイン論は，本質的に学問としての体系性を獲得し難いのかもしれない。

先づその第一の理由と考えられるのは，

デザインという言葉のもつ多様性である。この言葉は，本来，「計画する」といった，動詞的な性格の意味をもっているが，私達は，その動詞的性質，即ち行為の結果に対しても，この言葉を用いている。デザインという言葉には，動詞的な性質と名詞的な性質の二面性が認められるのである。動詞としてのデザインと名詞としてのデザインは，全くの別概念ではあり得ない。しかし，その両者に対する学究的なアプローチには，方法論や目的に於いて，少なからぬ相違があるように思われる。

動詞的性格，即ち行為としてのデザインに関する理論的研究は，実践者の立場にたった研究であり，その目的は功利的な態度に基づいていると考えられる。つまり，デザイナーによる，「いかにすれば優れたデザインが実現できるか」という問いかけである。またこの問いかけに対するアプローチは，それぞれのデザインが扱おうとする対象領域によって，異なると予想される。

一方，名詞としてのデザインに対する研究は，云わば観察者の立場から成される，「デザインとは何か」「デザインとはいかなる造形なのか」といった問いかけを核とするであろう。動詞としてのデザインに対する考察とは，その動機や目的に於いて，そもそも異なっている。そして名詞としてのデザインを研究する者には，静観的，かつ客観的な視点をもつことが求められる。その実現の為には，できる限り，デザインの実践から身を引きながら，しかもデザインの諸現象に対して熱い視線を送るといった，アクロバチックな態度が要求されよう。

また名詞としてのデザインに対する研究は，デザインの領域限定に対する，不断の問いかけでもある。現在，私達が提起し得るデザインの領域限定の一つに，芸術とデザインの関係を出発点とするものがある。即ち，人間の創作物の中で，ある種の精神的な特殊性を有するものを芸術の範囲に含め，それ以外をデザインの範囲に含める考え方である。芸術作品に対して，日常生活を越えた特殊な価値を認め，デザインに対しては，日常生活との関わりの中にその意義を見い出そうとする。とするならば，デザインとはそもそも，生活に関わる造形領域であるということになり，デザインの本質は，生活という概念の本質に関わってくることになる。しかし生活という概念は，あまりにも身近であり，普遍的であり，それでいて個別に多様であり，捉え難い。デザインに対する理論的考究の困難さは，実は，生活という概念の難解さに由来していたのではあるまいか。しかし，私達は，デザインについて問いかける為に，生活についても問いかけ続けなければならないのではないか。

（かねむら・きょういち）